# 聖夜に君と笑えたら

優輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖夜に君と笑えたら

【Ｎコード】
Ｎ１１２７Ｄ

【作者名】
優輝

【あらすじ】
「ねえ、笑って？」まだ笑っていられた。あのときは。あの人が、ここにいた時は……。そして俺は、１０年後、同じ言葉を言われることになる。俺の最も憎む少女に……。

## 第一話（前書き）

ギフト企画参加作品です。ギフト企画で検索又は、「風海堂ギフト館」で、他の作者さんの素敵な作品を読むことができますので、是非よんでみてください。

# 第一話

空は、冬らしい灰色の雲に覆われていた。隣にある公園も、休日だというのに子供一人いないせいで、閑散としていて寂れて見えた。

その中、冬樹は、聖書を読んでいた。

別にキリスト教だというわけではない。むしろ、神様など信じてはいない。それでも読んでいるのは、あの人に勧められたからだ。

『人間たるもの、人生に一回は聖書を読むべきよ！』

あの人もキリスト教徒ではなかった。しかし、某小説を読むことで、聖書が愛読書になった。曰く『聖書とは人が今より少し格好良く生きるための参考書』らしい。

くだらないと思ったが、あの人が言った事だから読むことにした。そして、聖書は冬樹の愛読書ともなった。

「冬樹。いますか？」

ふと、少女の声が聞こえた。

名は優希（ゆき）。

あの人の妹だった。

「冬樹？」

「いるよ」

「ああ、ここにいるということは、聖書を読んでいたんですね」

そして、優希は盲目だった。詳しくは知らないが、どうやら生まれつきだったらしい。

十年間住み続けているこの孤児院を、優希は普通に歩く。盲目だなんて嘘のように。実際、今もぶつかることなく扉を開けた。
だけれども、やはり人がいるかはわからない。気配でなんとなくわかっても、それが誰だかなんて声を聞かなければ分からないのだ。
こういうときに、実感してしまう。彼女は、本当に光を見ることは一生無いのだと。

「何で……」
「はい？」
「何で、聖書を読んでいたと分かったんだ？」
「冬樹は、聖書を読む目的以外では書架室に入りませんから」

優希は何でもないことのように言った。それに、冬樹はため息をつく。
優希は冬樹の行動パターンを知り尽くしている。同じように、冬樹も優希の行動パターンならある程度分かっている。
お互い、そんなに観察眼が優れているわけではない。ただ一緒にいたからわかるだけだ。この十年間、優希と過ごさなかった時間はないと言ってもいいほど、二人は共にいた。

しかし、付き合っているというわけではない。

むしろ、付き合うわけが無かった。自分には、ただ一人、あの人しか眼中にない。他の女などどうでもよかった。
何より、冬樹は優希を憎んでいた。
最愛（あのひと）の人を奪った、この少女を――。

## 第二話

それは十年前のこと。冬樹が、八歳のときだった。
冬樹は、両親を亡くしていた。他殺でも事故死でもない。
一家心中だった。
その中でただ一人、冬樹だけが奇跡的に生き残ったのだ。
何故かはよくわからない。単純に運が良かっただけだろう。
そして、親戚にたらいまわしにされることもなく、冬樹は孤児院に入った。

その時に、あの人に出会ったのだ。
両親を亡くし、全てがどうでもよくなって、死んでしまおうかと思っていた。けれど、あの人のお蔭で救われた。運命だと思った。
たかが八歳のガキがと思うかもしれない。けれど、冬樹にとって、あの人との出会いは奇跡だった。

そして冬樹は、その人に恋をしする。

もちろん、冬樹はこれがかなわぬ恋になるだろうことは、幼いながらにも分かっていた。歳をとれば違うかもしれないが、八歳の子供と高校生では、流石に話にならない。
それでも良かった。あの人のそばにいれるなら、この恋が叶わなくたって別に良かった。
しかし神は残酷だった。そんな、儚い思いさえ、無碍にした。

目の前に横たわるのは、一生動く事のないあの人。
冬樹の、命の恩人にして、運命の人。
何故……と思った。

大切な両親は、自分を残して死んでしまった。
そして、折角掴みかけた幸せさえ、またもぎ取られてしまった。
何故……？

理由は、後々知った。
死因は他殺。母親に殺されたそうだ。
あの人には、妹がいて、その妹は生まれた頃から盲目だった。
そして同時に、夫も突然倒れ、いつ死ぬのかもわからない状態となった。
他人に蔑まれ、親戚にも辛い目で見られ、あの人の母親はかなり憔悴していたらしい。挙句、自分を支えてくれる人はもう傍に居ないときた。

そしてある日、突然というべきか当然と言うべきか。
あの人の母親は、発狂した。

母親にとっての不幸の象徴である、盲目の妹を殺そうと、切りかかったのだ。あの人が、家に帰った直後の話だった。
あの人は、妹を必死に護ろうとした。でも距離があって、母親を止めて、妹を護るには時間が無さ過ぎた。
自分の身を盾にするしか、方法が無かった。
そして、あの人は、そんなことを躊躇する人間では無かった。

事件の日から数日が経ち、冬樹は再び生きる希望を失った。
ただ、あまりのショックに、怠惰的に生きながらえていただけだった。

そして、あの盲目の妹が孤児院に来た。

盲目の妹は、あの人にはあまりにも似てなかった。顔立ちではない。むしろ、顔立ちはかなり似ていた。違うのは雰囲気だ。あの人の、周りを自然と明るくする、優しくて強くて大きな存在感が感じられなかった。

弱々しくて、生気のない雰囲気。まるで、自分のようだと冬樹は思った。

「あなたは……春藤夜（はるとうや）　冬樹さんですか？」

盲目の妹は、何故か名前を知ってた。

「姉から伝言です」

体が震えたらしかった。

あの女性（ひと）が、最後に伝言を……？

「『ねえ、笑って？』」

盲目の妹から伝えられた伝言。

それは、初めて会ったときの言葉。

冬樹を救った言葉。

同じだった。

あの時と同じく、その言葉は、冬樹に『生きて』と聞こえた。

穴の開いた心に、唐突に悲しみが湧き上がってきた。

今になってやっと涙が溢れた。とどまる事の知らない涙は溢れ続け、目の前の盲目の妹を困らせた。けれど、どうでもよかった。

ただ、泣けるだけ泣いた。痛みが涙になって溶け出すなんてことはなくて、ただただ思い出が溢れてくるだけだった。

「名前は？」
「ゆき、です。優しい希望とかいて優希」
「そっか……」

あの人も、そんな感じの名前だった。
そして、その名の通り、冬樹にとって希望だった。

「僕は、優希を許さない」
「……」
「あの女性（ひと）を、美希を殺した優希を絶対に許さない」

今、自分に必要なのは希望でも約束でもない。
怒りと憎しみだった。
生きる目的が無ければ生きれないほど自分は弱いから。強い目的は、無くなり易い希望や約束であってはいけなかった。
そんな自分勝手な恨み。優希もそれをなんとなく感じていたはずで。
それでも――
「……はい」

優希は、それを受け入れた。
これが、冬樹と優希の出会いだった。

それから十年。
冬樹は笑うことなく、優希は無くことなく、生きてきた。

## 第三話

「……というわけで、出かけますよ」
「は？」

優希の話を全く聞いていなかった。それでも大人しく、分かったと言えばいいのに、思わず聞き返してしまう。

「冬樹、私の話聞いていませんでしたね？」
「あー……」
「気をつけたほうがいいですよ。冬樹は嘘をつくとき、口に手で覆う癖があります」

自分させ知らなかった癖を言われた。気まずくなって眼を泳がせるが、癖というのは総じて自分が気づくよりも相手が気づくほうが多いのだと割り切った。

「冬樹は割り切るのも早い……」
「と、とにかく！　何で出かけるんだ」

誤魔化すために、無理やり話題を元にも戻す。優希は心情の変化さえ見破っているようだった。

「ですから、クリスマスパーティの準備です」
「ああ。もう十二月二十五日か」

この孤児院では、十二月二十五日にクリスマスパーティが行われる。そのパーティに参加する事は孤児院での規則だった。病気などのどうしようもない理由以外では、欠席は認められない。

「クリスマスパーティの買いだしか？」
「はい」
「……一緒に行けと？」
「それは冬樹の自由ですよ」

孤児院に住んでいる者は欠席できない。よって、パーティは年齢のバラバラな人たちがそれなりに集まる。買うものの量も少なくは無い。当然、一人の少女が運べる量ではない。ましてや優希は盲目だ。

「……出かけるぞ」
「はい」

ため息交じりに言うと、いつも通りの、でも少し楽しげな声で優希が帰ってきた。

外は予想通り、非常に寒かった。しかしその中でも、ミニスカートの女性が多々いるのだから分からない。そして、その女性達が寒い寒いといいながら連れの男性に引っ付くのは、理解不能だった。寒いのなら、格好を見直したほうがいい。

そんな感想を抱きながら買い物を早々に終わらせる。休日というだけあって人通りが多い。冬樹は、こういった場所が好きではなかった。

「優希、帰るぞ」

はぐれないよう、自分のジャンパーの裾を握っている優希に呼びかける。しかしいつもの返事が返ってこなかった。
いぶかしんで振り返ると、優希はどこか表情の抜け落ちた顔で店をみていた。優希が笑顔を崩すことは珍しい。ましてや表情を欠落させることなど、この１０年間、冬樹でさえ数回しか見たことがなかった。何が優希をそうさせるのか興味があって、優希の顔の先にあるものを見てみる。
何てことのない雑貨屋。店頭では、従業員が大声で商品を売り込んでいる。
しかし、その店頭に置かれている商品を見て納得した。
……
テディベアだ。

優希は、嫌われていた両親に貰った最初で最後の誕生日プレゼントが、テディベアだった。しかし、そのテディベアはあの事件の際、発狂した母親にずたずたにされたらしい。
優希にとっては、昔の平和な日々の象徴であり、全てが壊れた悲しみの象徴でもある。
きっと、あの店から聞こえたテディベアという言葉に反応したのだろう。

「……」

俺にとって、優希は憎むべき人間だ。だから当然、誕生日やクリスマスにプレゼントをあげた事はない。貰ったことはあるが、使っていいのかわからず結局、部屋のクローゼットに積み上げられている。
義務なんてないし、義理なんてさらにない。
しかも、あれは良いことだけを象徴した物ではないのだ。自分が

あれを贈ることは、嫌味に取られる可能性すらある。冬樹は、優希を憎んではいるが、別に精神的に攻撃したいわけではないのだ。
優希は相変わらず表情の無い顔でテディベアを見つめ、冬樹はそのそばに立ち尽くしていた。時間が流れ、日の短い冬の空は、すでに赤みが差し始めていた。

「おい、優希」
「……はいっ？」

流石にと思って呼びかけると、優希が驚いて返事をした。呆けていたことに気づいていなかったらしい。

「あ、すいません。いつの間にか、こんなに時間が経っちゃって」
「……」
「すぐ帰りましょう。院長さんが心配してるかもしれません」

慌てて帰路につこうとする優希は、無理をして笑っているようだった。本人は完璧に笑っているつもりのようだし、たぶん他人から見てもそう映るだろう。
しかし、十年間共にいた自分が、優希の表情の違いを見極められないわけがない。

「優希」
「なんですか？」
「去年貰った万年筆」
「はい？」
「数日前、手元にペンがなくて間違って使ってしまった」

何を言ってるのだろうか、といった感じで優希は冬樹を見た。知り尽くされているのではと思っていたが、どうやら全てではないら

しい。

「万年筆はどう見積もっても高い」
「別に気にしなくてもいいですよ。安物ですし」
「優希は安物を買わない。少なくとも、誰かにあげる時は」
「……」

優希は反論をしなかった。優希が自分よりも他人を、特に冬樹を大切にすることぐらいは、分かっている。傲慢や驕りと言われるかもしれないが、これだけは間違っていないと思う。

「それで、高価なものを使ってしまったのだから、こちらも高価なものを使わせなければならないと思う」
「……えっと、別に気にしなくてもいいんですが」

とりあえず、優希の意見は無視した。あげるかあげないかは、あげる側が決めることだ。

「そこで、優希は何か欲しい物はあるか？」
「特にないです。ですから、いらな……」
「そうか、ないか。なら俺が決める」
「冬樹、人の話聞いてます？」

聞いてるけど無視しているんだ、という言葉を心の中で呟いて、優希の手を取った。

「よし、行くぞ」
「はあ。分かりましたよ」

話をことごとく無視されて諦めたのか、優希は大人しくついてき

た。ついてこなくても、連れてくる気ではあったのだが。あれを買うのに一人で行くのは極力避けたい。

「で、何を買ってくださるんですか？」
「……とにかく、黙ってついこい」
「はいはい」

店頭に並んでいるテディベア。値段を見ると、想像以上に高い。別に買えないわけではないが、何故くまのぬいぐるみがこんなに高いのか理解できない。ついでに、これを買おうとしている自分も理解できなかった。

「これ、ください」
「はいよ。隣の子にあげるのかい？」

それに答えることはなかった。確かにその通りだが、他人に言うのははばかられる。

「ラッピングは？」
「いりません。袋もいりません」
「飾り気ないねえ。折角、眼つぶらしてまで待たしてるんだから、飾ってやりなよ」

どうやら、優希の盲目を単純に目をつぶっているだけと捕らえたようだ。優希はあまり、眼が見えないという仕草をしないので、こう捉えられるられることが多い。
従業員は、渋りながらもテディベアを差し出した。あれほどいらないのと言ったのに、店頭においてあったときはなかったクリスマスカラーのリボンが首に巻かれている。

「冬樹どうしました？　というか、何を買ったんですか？」

冬樹のため息を聞いて、優希が心配した。冬樹が慣れない物を買うとき、優希は必要以上に心配する。何か騙されるとでも思っているのだろうか？

「冬樹？」

「なんでもない。とにかく、これでチャラだ」

そう言ってテディベアを渡した。いろいろと考えたのだが、結局、受け取る側がどう思おうと勝手だと割り切った。優希の言うとおり、自分は割り切るのが早いのかもしれない。

優希はしばらく受け取ったものを、触っていた。眼の見えない彼女は、ものを触って形を確かめる。

「これ……」

「さて、今度こそ本当に変えるぞ」

受け取った物が何なのかに気づいて驚く優希の言葉を、冬樹は強引に遮った。そのまま手を引いて、帰路につこうとする。

「これ、クリスマスプレゼントですよね？」

「クリスマスにあげた物が全てクリスマスプレゼントになるなら、そうだろうな」

恥ずかしさと心配で、かなり遠まわしな肯定をしてしまった。だが、それを気にすることなく、優希は嬉しそうに笑って、テディベアを胸に抱いた。

「冬樹、ありがとうございます」

「万年筆の礼だ」

とりあえず、冬樹が心配したような結果には陥らなかったらしい。それに安堵して、緊張をといた。すると、後ろのジャンパーを強く引っ張られた。思わずとまる。

まだテディベアについて何か言われるのかと思い、慌てた。

「冬樹」

さっきの嬉しそうな声とは対照的な、静かな声だった。いつもなら気づくはずの声の変化に、しかし平常心を失っていた冬樹は気づかなかった。

「なんだよ。本当に、万年筆の礼だけだからな？　それ以外の意味はな……」

「『笑って？』」

そういわれた瞬間、心臓を鷲づかみにされた気がした。呼吸が止まる。

その言葉は、あの人に貰った大切な言葉――。

「『ねえ、笑って？』」

冬樹の変化に気づいていないわけではないはずなのに、優希はその言葉をやめない。十年前のあの日、優希がその言葉を冬樹に伝えたから、優希は一度もその言葉を口にしたことは無かった。冬樹にとって、何より大切な言葉だと理解していたからだ。

「『ねえ……』」

「っ！　うるさい！」

さらに続けようとする優希を、冬樹は乱暴に遮った。これ以上は耐えられなかった。

「何が、何が笑えだ！」

「……」

「それは、優希の言葉じゃない！　あの人の言葉だ！」

「……冬樹」

「俺は、優希を絶対に許さない！」

気づけば、走り出してた。孤児院とは逆の方向へ。

人ごみの中を、無理やり走った。迷惑な顔をされたが、気にならなかった。

あのまま、優希の目の前にいるよりなら、ずっとましだと思った……。

## 第四話

怒りがあり、憎しみがあった。
あの人の言葉を、優希が言って、そのことに怒りが起こった。
あの日のことを思い出して、憎しみが沸いてきた。

けれど、何より恐ろしかった。

その言葉を、あの人の言葉ではなく、優希の言葉として受け入れてしまいそうなことが。
そして、そう思ってしまった自分が。
何より恐ろしかった。

しばらく走って、流石にもう走れなかった。長距離を全力疾走したせいで、心臓がバクバクとなる。だが、それが全力疾走のせいだけではないのは、明白だった。

「な、んで」

腕を目を隠すようにしておいて、近くの草むらに仰向けになった。荒い呼吸は、全く収まらない。

「何で、今更……」

本当に、今更だった。
十年前のあの事件から、冬樹は笑えなくなった。そして、優希は泣けなくなった。

お互い、たいていのことはずばずばと言うが、この話題にだけはどちらも触れなかった。良い思い出でも、後に振り返って笑える思い出でもないからだ。

何に、何で今更……。

しばらくすると、呼吸も少しは楽になってきた。眼から腕をどかすと、あたりはもう暗かった。空を見上げるが、月も星もない。雲がかかっているのだろう。

今何時かはわからないが、早く帰らねばならない。たとえ帰りたくなくとも、このままでは院長が心配する。過去に家出経験のある冬樹は、特に心配されていた。

重い腰を上げて、無理やり立ち上がる。街灯がちらほらとあった。ここから孤児院まで、そう遠くは無い。十分ほどで着くだろう。

クリスマスの買い物を持って、ぼんやりと帰路についた。

孤児院につくと、なにやら騒がしかった。何事かといぶかしんでいると、院長が駆けてきた。

「まあ、冬樹君！　無事だったのね」

「ええ」

「あら？　優希ちゃんは」

「え？　帰ってきて……」

「まだ、帰ってきてないの。てっきり冬樹君と一緒だと思ってたのに」

そう言うと、院長はまたあたふたし始めた。しかし、そんなものは眼中には入らない。

優希が帰ってきていない？

優希は孤児院と商店街の行き来はよくしていた。盲目だとは感じさせないほど、しっかりと歩く事ができる。それに、あの辺は人通りも多く、優希が盲目だと知っている人もたくさんいる。帰ってくるのに困る必要はないはずだ。

交通事故という考えもあるが、この時間まで連絡がこないのもおかしい。優希は、もしものときのためによく生徒手帳などの証明書を持ち歩いていた。

他に考える事ができることといったら……。

「あ……」

「どうしたの？　冬樹君」

「優希のこと探してきます。パーティはもう始めてていいです。警察とかにも連絡しないですください」

「でも……」

「優希は、必ず俺が連れてきます」

冬樹はそう言うと、孤児院を飛び出した。優希が何をしているのかが分かったのだ。分かると同時に、怒りが沸いてくる。しかしその怒りは、優希から逃げたときに感じた怒りとは大分違っていた。

「あの馬鹿っ！」

優希は、冬樹を探しているのだ。あの事件以来、冬樹はあの人の言葉を支えに生きてきたが、それでもたまに投げやりになることがあった。自殺を考えた事もある。

それを実行させないために、優希は冬樹を離れる事が無かった。冬樹を一人にさせないように、ずっと傍にいた。

今では、昔のようにはならないが、それでも優希は冬樹の傍にいる。居場所を知らせずに出かけようものなら、場所を知らなくても探しに来る。

（あの時も、そうだった……）

五年前、冬樹は孤児院を家出した。正確には飛び出しただけで、準備すらもしていなかったので家出とは言わないのかもしれないが。

その頃、冬樹は悪夢にうなされていた。あの人に置いていかれて、また一人ぼっちになってしまった夢。あの事件以来見続けている夢だが、最近は酷かった。

夢を見て、眼を覚まして生活を始めれば、優希を見てまたその夢を思い出す。

そのサイクルから抜け出したくて、孤児院を飛び出した。孤児院にいる限り、優希は傍にいる。寝てしまえば、夢を見る。だから、外にいれば抜け出せると思った。

外は、雨が降っていた。

冬でこそなかったが、すでに寒くなり始めていた頃で、雨に当てられ身体はすぐに冷えた。流石に寒さに我慢できなくなって、少しでも雨宿りできる場所に行こうと思った。

誰にも見つからなくて、雨宿りが出来る場所。そんな場所を一つだけ知っていた。

少し離れた町内にある公園の林だった。あそこは、木が生い茂っ

ているお蔭で、ほとんど雨が下に来ない。完全に防ぐ事は不可能だが、少しぐらいなら何とかなるだろうと思った。

茂みの中の大きな木の下で、ただ、うずくまっていた。寒かったお蔭か、眠くはならなかった。

長い時間、何かを考える事も無く、そこにいた。何も考えたくなかった。

ふと、その時茂みの奥から音が聞こえた。思わず、身をすくませる。そして、学校で聞いた噂を思い出した。

そういえば、この林はクマがいるとか誰かが言ってたような。それ以外にも、幽霊とか妖怪とか、幽霊屋敷がどこかにあるとか、噂の耐えない場所だったっけ……。

幽霊はあまり信じていないし、こんなしょぼい林にクマなんていないだろうとも思う。しかし、この暗い中雨が降っている聖で視界が悪いと、どうしても思考は悪い方向へ向かってしまう。

音が大きくなってくるにつれて、冬樹の緊張も高まった。雨はうるさいほど音を立てて振っているはずなのに、草を掻き分ける音は全く消されない。

そして、音は直ぐ傍までせまって来て……

「きゃあ！」

「うわああ！」

何か白い物とその叫び声に、思わず叫び声をあげた。

「っ！　冬樹？」

「って、優希？」

白い物体は優希だった。少し前に買ったばかりの白いジャンパーを着ているらしい。

「冬樹！　無事ですか！」
「え、俺は無事だけど……」
「良かった、良かった――！」

優希は本当に安心したように、冬樹の手を強く握り締めた。冬樹は、優希の行動の意味が分からず、呆然とする。

「何してたんだ？」
「冬樹を探してたに決まっているでしょう！」
「俺を、探してた？」

この雨の中、お前が？　その問いは声として発する事ができなかった。見れば、買ったばかりの白いジャンパーはドロだらけな上、所々切れている。腕や足も、汚れや切り傷が目立った。
この雨の中、何処にいるか分からない冬樹を探すのはかなり至難なはずだ。ましてや優希は盲目。行ったことのない場所は、一人ではまともに歩けないのだ。林の中でだって、眼が見えなければどれほど進むのが難しいか……。

「……お前、馬鹿か？」
「折角迎えに来たのに、馬鹿とはあんまりでは……」
「迎え？」

呆然とした冬樹の問いに、優希は「はい」と安心したように笑って答え、そして手を差し出してきた。その手を、静かに握る。

ああ、そうだ。
あの日から、俺はあの夢をみなくなった。
あの日から、本当の意味で、俺達は一緒に生きてきたんだ――。

# 第五話

冬樹は走る外は暗いが、電灯があるからそれほどでもない。何より、ここはそんなに人通りが少なくないので、暗いというイメージを受けなかった。

向かっているのは、橋の近くにある広場。

小学生の中では通称、橋場広場と語呂の悪い名前で呼ばれている。

十年前、冬樹があの人と出会った場所だった。

「優希！」

広場付近で、呼んでみるが返事はない。

ここでは無かったのかと歯噛みする冬樹に、ふと小さな声が聞こえた。

「……ふ、、き？」

「っ！？　優希！」

ほとんど何も聞こえなかったが、確かに優希の声だった。声のした方に駆けていくと、優希が立っていた。

近づけば、五年前のように、服は少し汚れていて、手にいくつか傷があったのが分かった。

「冬樹、大丈夫ですか？」

「何が、大丈夫ですか、だ。大丈夫じゃないのは優希のほうだろ」

五年前と同じように自分より、冬樹を優先させることに苛立ちを覚える。

何故、優希は自分と共にいるのだろう。共に居なければならない

理由なんて、もう何にもないのに……。

「優希は馬鹿だ……」

「何故ですか？」

「何で、何で俺なんて探しているんだよ。何で俺と一緒にいようとするんだよ」

「……」

「一人で、進めばよかったじゃないか。何で、俺を待って過去に縛られてるんだよ」

そう。優希一人なら、もっと早くに勧めたはずなのだ。なのに、優希はずっと待っていた。

頭を垂れてそう言う冬樹に、優希は楽しそうに笑って言った。

「馬鹿は冬樹です」

「は？」

「私は、冬樹が思っているような強さなんてない。あの暗闇の中、冬樹に償うという目的があったからこそ、私も生きていられたんですよ？」

「……」

「私は、あなたが居たから生きているんです。あなたが居なければ、進めないんです」

その言葉に涙が溢れた。優希と出会ったあの日泣いてから、泣かないようにしようと思っていた。一生分泣いて、笑う事も泣く事もなく生きていこうと思っていた。

けれど、一生分泣いたと思っていたのに、自分はまだ泣く事ができるらしい。

「冬樹。笑ってください」

泣いている冬樹に、静かに優希はそう言って、顔に触れた。冬樹は、泣きながらも、無理やり笑おうと、ここ十年間動かしていなかった頬の筋肉を使おうとする。しかし、上手く笑えたような気がしなかった。それに、優希が笑った。

「面白い顔です」
「わかるのかよ」
「わかりますよ」

少しむっとして言い返してやると、普通のことのように言い返された。今なら笑えそうな気がするのだけれど、やはり頬の筋肉は上手く笑顔を作ってはくれないようだった。

「冬樹は、まだ笑えないんですね」

少し残念そうに、そして悲しそうに優希は呟いた。

「優希こそ、まだ泣けないんだな」

明るい声音で言われた事に少し驚きながらも、優希は笑って頷いた。十年間、ずっと一緒に居た。ずっと傍で知らず知らずのうちに支えあって生きてきた。
伝い得たい事は、言わなくても伝わったらしい。

「帰ろうか」
「はい」
「もうクリスマスパーティ始まってるな」
「あ……」
「どうした？」

突然、停止した優希に驚いて、冬樹は顔を覗き込むようにして聞いた。覗き込んだ顔は、冬の寒さのせいではない、青さが浮かんでいるような気がする。

「私、クリスマスのケーキ持ったままなんですが……」

「え〝……」

孤児院の院長は、クリスマスケーキがなければクリスマスパーティを始めない主義の人だった。クリスマスケーキに始まり、クリスマスケーキで終わらないと気がすまないらしい。

「どうしましょう。確実に、パーティ始まってませんよ」

「どうしたもこうしたも、とりあえず急いで帰るぞ！」

冬樹は優希の手を掴んで走る。いきなり掴まれ引っ張られたことに驚きながらも、優希も走った。

笑えない俺。

泣けない君。

俺は、目的が無ければ生きていけなくて、君は、誰かに縋らなければ生きていけない。

俺達二人とも、とても弱いんだ。

それでも、二人でなら進めるだろうか。

この暗く悲しい道に、光を見出す事ができるだろうか。

願わくば、来年の聖夜こそ、君と共に泣いて笑えますように――。

## 第五話（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

初の恋愛モノです。クリスマスの夜の恋人とかいいよなあと思って書いたものです。結果的に、クリスマスと関係ないものになってしまいましたが……。

稚拙な作品ですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1127d/

---

聖夜に君と笑えたら

2010年10月21日13時23分発行